



TITLE:

# 京大上海センターニュースレター 第260号

AUTHOR(S):

京都大学経済学研究科上海センター

---

CITATION:

京都大学経済学研究科上海センター. 京大上海センターニュースレター 第260号. 京大上海センターニュースレター 2009, 260

ISSUE DATE:

2009-04-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/71629>

RIGHT:

---

---

# 京大上海センターニュースレター

第 260 号 2009 年 4 月 6 日

京都大学経済学研究科上海センター

---

---

## 目次

- 「中国経済研究会」のお知らせ
  - 日系食品工場の衛生管理—連雲港味の素の場合—
  - 西郷隆盛と毛沢東
  - 【中国経済最新統計】(試行版)掲載のお知らせ
- +++++

## 「中国経済研究会」のお知らせ

世界的な金融危機が深刻さを増す中で、中国経済は今まで以上に注目されるようになりました。一方、激変する中国経済も我々に多くの新しい課題を提起してくれました。中国経済を研究し、そして、それに関心を持つ研究者や学生同士の交流を深めるために、京都大学経済学研究科上海センターでは、「中国経済研究会」をこの四月から立ち上げることにしました。

この研究会は中国経済に関する学術研究報告を中心として、必要に応じて経済情勢の報告や日本をはじめとする他の国に関する研究報告も行うことができます。また、研究会には何方でもご自由に参加できますので、幅広い方々のご参加を歓迎します。開催時期は原則として授業期間中の毎月第3火曜日としますが、2009 年度では、以下の日程を予定しています。

前期：4 月 21 日（火）、5 月 19 日（火）、6 月 16 日（火）、7 月 21 日（火）

後期：10 月 20 日（火）、11 月 17 日（火）、12 月 15 日（火）、1 月 19 日（火）

現在予定されている研究報告は下記の通りですので、大勢の方のご参加をお待ちしております。

世話人：京都大学経済学研究科教授 劉 徳強

記

### 第一回報告：

時 間： 4 月 21 日 16：30－18：00

場 所： 京都大学吉田キャンパス・法経済学部東館 108 演習室

報告者： 岑智偉（京都産業大学教授）

テーマ： 「中国における地域間収束について（仮題）」

（なお、研究会終了後、有志による懇親会が予定されています。）

\*\*\*\*\*

## 日系食品工場の衛生管理—連雲港味の素の場合—

大西 広

昨年は天用食品事件のために中国からの加工食品の輸入が急減したが、これで打撃を受けたのは日本人でもあった。この 3 月に私はこの様子を調べようと「日中友好経済懇話会」の視察団員として連雲港にある味の素の日本向け冷凍食品工場を訪問したが、やはりここでも特に日本向けの家庭用冷凍食品の売れ行きは激減。打撃の少ない業務用と問題のなかった対米輸出のために売り上げはようやく半分をキ

ープしているが、それでも工場はやや閑散とした様子であった。問題の天洋食品はさておき、同業種の他の加工食品企業は衛生管理に絶対の自信を持っている。なのにどうしてこのように信頼されなくなってしまったのか。普通の場合は同業他社の失敗は自社のチャンスであるはずである。が、ここでは完全に他者の失敗がそのまま自社への打撃に直結した。このことをナマの声で聞き、不合理を感じた訪問でもあった。

### 中国でしかできない衛生管理

もちろん、人の口に入る商品を作っているのであるから衛生管理は極めて重要であり、そのことは食品企業が最も力を入れているものである。そして、このため、「工場見学」も本来謝絶のところを無理を言って受けていただいた。そして、そのはず、食品工場の衛生管理たるものは想像以上に厳格なものであったからである。

たとえば、見学の服装であるが、写真のような「重装備」であった。頭については、まずマスクをかぶり、その上に頭、ひたい、のどを覆うサポーターをかぶる。そして、その上にさらに写真にある頭巾のようなものをかぶった。また、下半身のズボンは一旦パンツ姿にさせられてから履き替えたもので、これにも驚いた。そして、その上に、手の消毒も厳格で、作業場に入る前にまず石鹸で洗う、消毒液に30秒漬ける、それをもう一度水で落とす、乾かすという手順を踏んだ上に、全身の空気洗浄、全身ローラーによるほこり取り、最後に現場でもう一度消毒、というものであった。ついでに言うと、腕時計や指輪もはずすよう指示され、またこの一ヶ月以内に中国以外の外国に行ったことがあるかどうかチェックされるというほどであった。

このようなものであるから、現場作業でももちろん厳しい管理がなされていた。現場は素材のチェックを行なう工程と調理と冷凍・パッケージを行なう工程とが完全に分離していて、相互に出入りするためには上記の服装の完全な着替えと手などの消毒を全面的に繰り返さなければならない。そして、その上に、たとえば、ブロッコリーのチェックでは、全ピースを目でチェックし、虫メガネでしか見れないような小さな小さな「ムシ」のあるものを見つけて取り除く作業をしていた。薄く切られたレンコンも一枚一枚目でチェックをしていた。また当然、残留農薬を取り除く作業も丁寧になされている。こうした作業はまったくの人海戦術であり、見学した私たちは「衛生管理は人海戦術」であることを知った。これは如何にしても日本ではできない。どうしても中国でしか「衛生管理」はできないのである。



### だからこそ問題は労使関係

したがって、改めて思うことは、こうした厳格管理のもとで残留農薬が排除されないはずは絶対にない、ということである。中国のすべての食品工業がそうであるとはもちろん断言できないが、日本に輸出する企業の管理はこのようなものであろう。したがって、天洋食品事件はやはりどう考えても悪意ある意図的なものであって、それは従業員によるものであると考えざるを得ないだろう。そして、そのため、この味の素でも従業員との関係をよくするために様々な苦勞をしていた。

たとえば、「部長意見箱」というものがあり、春節の扱いなど日本人が気づかない要求をくみ上げている。また、売り上げ激減のために行なった雇用調整でも多額の補償金を払っている。その他、厚生施設にも細かな配慮をしていた。また、素材の品質確保のためには納入業者200社の「査察」も念入りで、何と200の項目をチェックしているという。この項目の一つには「賃金がちゃんと払われているか」というものもあるということであるから、やはり「安全、安心」のポイントは労使関係にあると考えてい

ることになる。

\*\*\*\*\*

## 西郷隆盛と毛沢東

02. APR. 09

小島正憲

昨年の NHK の大河ドラマは「篤姫」だった。私はそのドラマの中の篤姫と西郷隆盛の関係を見ながら、彼らの生きた幕末という時代の裏面史にたいへん興味をそそられた。そんなとき書店で半藤一利氏の「幕末史」が目に入ったので早速買って読んでみると、そこに「西郷隆盛は毛沢東と同じ」という文言が出てきた。しかし文中にはその文言の詳しい説明はなかった。そこで私は半藤氏の他の書物も読んでみた。すると「それからの海舟」という文庫本の中に下記のような叙述があった。※半藤一利著 ちくま文庫刊 「それからの海舟」より

「考えてみるまでもなく、西郷の理想とする儒教的哲人政治は、一糸乱れぬ官僚的な政治指導体制とは相容れぬものであったかも知れない。西南戦争は、大久保を頂点とする官僚的行政体制に対する西郷の最後の“文化革命”という形をとった。…と書いてくると、ここで一人の政治家の名が自然と浮かんでくる。毛沢東その人。武断主義、軍事戦略の天才、農本主義、経済オンチ、人々を魅了するカリスマ性、そしてたえざる“文化革命”への希求と、西郷との共通項をひろっていくと、妙な気になってしまう。結局、明治の近代化は西郷を排除してはじめて可能であったのであろう」

今の私には、この半藤氏の主張を全面的に検討するだけの能力はない。それでも半藤氏の指摘に触発されて、兵法経営研究家としての立場からこの二人の偉人を検討してみた。するとそこに特筆すべき共通項が見えてきた。以下にそれを記述する。

《目次：1. 毛沢東は西郷隆盛を学んでいた 2. 西郷隆盛の実相 3. 西郷隆盛と毛沢東の共通項 4. 西郷の戦争 5. 西郷の胆力》

### 1. 毛沢東は西郷隆盛を学んでいた。

毛沢東が日本の明治維新や西郷隆盛を学んでいたことについては、伝記などで紹介されているので日本でも多くの人が知るところである。しかし毛沢東が青年時代に、父親と別れるとき「西郷隆盛の漢詩」をほぼそのまま引用して、決意を示したことはあまり知られていない。この漢詩は実際には西郷隆盛のものではなくて、長州の勤皇僧：月性（西郷隆盛と入水した京都の僧：月照とは別人）の作であったが、それに感嘆した西郷隆盛が引用しようと考え書き留めておいたので、それを読んだ毛沢東が彼の作と間違えたものらしい。この事実は毛沢東が西郷隆盛をかなり深く研究していたことを示すものである。果たして毛沢東は西郷隆盛から何を学んだのであろうか。

勤皇僧：月性の漢詩「将東遊題壁」（毛沢東が西郷隆盛作と勘違いしたもの）

男兒立志出郷關 學若無成不復還 埋骨何期墳墓地 人間到處有青山

毛沢東の漢詩「留呈父親」

孩兒立志出郷關 學不成名誓不還 埋骨何須桑梓地 人間無處不青山

### 2. 西郷隆盛の実相

日本人の間で西郷隆盛の人気は高い。たしかに一般には明治維新の立役者でありながら、西南戦争で散った悲劇の英雄であり、その清廉潔白で誠実な人生を「南州翁遺訓」という形で世間に遺した人間として伝わっている。毛沢東もこのような西郷を学んだに違いない。しかしながら最近の研究に従いながら、時代を追って西郷を詳しく見てみると、そこから二つのことがわかる。

○は戦闘指揮。△は交渉指揮。その他に薩摩藩の行政改革、明治新政府での政策決定・実施があるが省略。

1864年 ○禁門(蛤御門)の変

△第1次長州征伐

66 △薩長同盟成立

67 △王政復古クーデター 小御所会議

68 ○鳥羽・伏見の戦い

△江戸城無血開城

○上野戦争

73 △征韓論

77 ○西南戦争

①西郷隆盛は「軍事戦略の天才」ではない。

西郷隆盛が直接関与した戦争は○印で、禁門(蛤御門)の変、鳥羽・伏見の戦い、上野戦争、西南戦争であり、それらを兵法の観点から判断すると決して上策ではなく、西郷を「軍事戦略の天才」と評するわけにはいかない。陣頭指揮に立って戦っているが、後世に語り継がれるような名戦術を駆使しているわけではない。ことに西南戦争にいたっては完全な負け戦であり、名将ならば絶対に行うはずがない戦いである。これらの戦いの分析は**附:4.**に展開しておく。なお西郷と同時代の名将には四境戦争の大村益次郎、北越戊辰戦争の河井継之助を挙げることができる。

②西郷隆盛は類まれなる「胆力」の持ち主である。

逆に西郷隆盛の真骨頂は△印の場面に現れている。彼は敵の懷に飛び込んでの交渉を得意とする。この交渉力の根源は胆力にある。第1次長州征伐、薩長同盟、小御所会議、江戸城無血開城などその見事な交渉は後世までの語り草になっている。そしてその極めつけは征韓論での朝鮮単身入国の主張である。それは最近に至っても、日経新聞が「西郷隆盛が残した宿題」(3/22付け)として、「西郷にとって気掛かりだったのは樺太に南下してくるロシアであり、対抗するには朝鮮、清国と組むしかないと考えていた。そこで自ら朝鮮を訪れ、腹を割って話すことで提携をまとめようとした」として取り上げられるほどである。西郷は自らの死をもうとわない類まれなる胆力を有していた。しかもそれは平常時ではなく危急存亡のときに発揮された。これらのことは**附:5**に詳しく論述しておく。

また西郷自身も自らを「破壊屋」と自覚しており次のように述懐している。

「もし一個の家屋に譬うれば、われは築造することにおいて、はるかに甲東(大久保利通)に優っていることを信ずる。しかし、すでに建築し終わって、造作を施し室内の装飾を為し、一家の觀を備うるまでに整備することにおいては、実に甲東に天稟あって、われらの如き者は雪隠の隅を修理するもなお足らないのである。しかし、また一度、これを破壊することに至っては、甲東は乃公(おれ)に及ばない」※毛利利彦著「大久保利通」

西郷は計画的かつ建設的で冷静沈着なリーダーというよりも、臨機応変な策を得意とする熱血漢タイプのリーダーと言える。つまり西郷は「胆力をそなえた破壊屋」であったといえよう。

### 3. 西郷隆盛と毛沢東の共通項

①西郷隆盛と毛沢東の共通項の第1は逆説的ではあるが、「二人とも軍事戦略の天才ではない」ということである。そしてそれにもかかわらず一般的に「軍事戦略の天才」と評されていることである。

西郷が「軍事戦略の天才」ではないことは本稿で論及した。毛沢東が「軍事戦略の天才」ではないことは、過去の私の長征実証研究でその論拠を展開しておいた。半藤氏は共通項として「軍事戦略の天才」を上げているが、兵法経営研究家としての私の視点では二人とも「戦さ下手」であり、名将というには程遠い。それにもかかわらず、その「戦さ下手」が「軍事戦略の天才」と祭り上げられたのか。この点については、次回以降の小論で言及したいと考えている。

②共通項の第2は「胆力」である。

西郷が類まれなる「胆力」の持ち主であり、それが創造よりも破壊のときに発揮されたことは、この小論で検討した。

毛沢東も類まれなる「胆力」の持ち主であったことには疑う余地がない。長征と名の付く彼の撤退作戦は「敵の裏をかく」ことによって成功してきた。長征の成功は毛沢東が、一般の軍人ならば考えつかない撤退戦術を次々と繰り出し、実践してきたことにある。つまり一般の軍人は「胆力」がないので不可能と考えあきらめてしまうような場面でも、毛沢東はそれを断固として実行した。結果としてそれが常識を破った戦術となり、「敵の裏をかく」ことになったのである。そしてこの「胆力」が破壊屋として発揮されたことも歴史が証明している。

さて、両者が備えていた「胆力」はどこに源泉があるのだろうか。生来のものなのか、あるいは教育で身に付くものなのか。この点についても以降の小論で検討してみる。

### 附:4. 西郷隆盛の戦争

①1864年7月 禁門(蛤御門)の変

・京都を追放されていた長州藩が失地回復を図って入京。在京の長州兵が2000人余となり、京都守護職配下の兵1500人を越える。その上、世子毛利元徳が正規軍3000人を率いて長州を進発。それに先駆けて在京の長州兵が拳兵し、嵯峨、山崎、伏見の三方面から進撃し、会津、薩摩を主力とした肥後、越前などの十余藩の兵と激突した。蛤御門で西郷隆盛率いる薩摩兵が奮戦し長州兵を撃退。

・この戦いで西郷は初めて陣頭に立って指揮をし、足に軽い銃創を受けた。

・現存する蛤御門には弾丸跡などが少なく、さほど激戦ではなかったのではないかとも思われる。

②1868年1月2～6日 鳥羽・伏見の戦い





・旧幕府軍は大阪から京都へ進軍。兵力は1万5千。本隊は竹中重固が率いて会津藩兵、鳥羽藩兵、新撰組などが従い伏見街道を、別働隊は滝川具挙が指揮して、桑名藩兵、大垣藩兵、見回り組などが続き、鳥羽街道を進軍。

#### 《蛤御門》

・新政府側も5千の兵を繰り出した。伏見方面は長州藩を主力として御香宮を拠点に布陣、鳥羽方面は薩摩藩兵を主力に鴨川にかかる小枝橋付近に布陣。  
・1月2日午後5時、鳥羽街道を旧幕府軍が強行突破しようとしたため開戦。薩摩側が鳥羽街道の左右に大砲をならべ陣を敷いている中に、旧幕府軍が縦列行軍で突入したため、集中砲火を浴び被害は甚大なものとなった。見回り組の捨て身の突入戦術や夜襲もあったが、圧倒的な火力の前に旧幕府軍は後退。伏見方面では市街戦が展開されたが、狭い市中での戦闘では旧幕府軍の大きな兵力は戦果を上げることができなかった。



#### 《鳥羽方面 小枝橋から》

・京都で総指揮にあたっていた西郷は緒戦の勝利で、この勢いに乗れば勝てると確信した。旧幕府軍は強行に突破すれば薩長側は道を譲ると思い込んでおり、十分な戦略を持っておらず、予想外の劣勢に慌てた。  
・1月5日午後、敗勢濃い旧幕府軍の前に、新政府軍の錦旗が翻った。これを見た旧幕府軍兵士は戦意を喪失した。味方だった淀藩や津藩も裏切ったため、旧幕府軍は大阪城まで敗走した。



#### 《伏見方面 伏見奉行所から》

・しかし新政府軍はこの有利さを見抜いて布陣したという記録はどこにも残っておらず、この戦いが西郷の名戦略であるという賛辞もなく、むしろ大久保利通や岩倉具視の知恵である「錦の御旗」が勝敗の帰趨を決したという見方が多い。  
・鳥羽・伏見の南方は、桂川、宇治川、木津川の3川が合流しており、大阪に撤退するにはこの隘路を通らなければならない。地形がきわめて複雑になっている上、最近では名神高速道路、京滋バイパス、国道、新幹線、JRなどが狭い地点に入り混じっており、旧幕府軍の撤退経路を探るのはたいへんであった。

#### ③1868年5月 上野戦争

・旧幕府軍の生き残り部隊が彰義隊を結成し、江戸市中を跋扈し浅草本願寺に駐屯し氣勢をあげた。それに対して新政府軍は兵力や軍資金を欠き、積極策を打つことができなかった。  
・新政府の首脳は、上野に本営を置く彰義隊の殲滅を目指して長州藩の大村益次郎にその指揮を委ねた。大村は50万両に及ぶ戦費の調達に頭を悩ましたが、大隈重信からアメリカ艦船を購入する予定の資金25万両を借り、あとは江戸城の宝物を売り払うなどをして調達した。



#### 《黒門》

・5月15日未明、江戸城に終結した新政府軍2000人が出陣し上野の山を取り囲んだ。黒門口を固めたのは薩摩、鳥取、熊本の兵、団子坂方面には長州、大村、佐土原の兵、不忍池を挟んだ本郷台には佐賀、津、岡山の兵がそれぞれ布陣した。迎え撃つ彰義隊は約1000名。  
・7時半ごろ、黒門口で戦闘が始まった。彰義隊の反撃もすさまじく、午前中は一進一退が繰り返された。黒門口では薩摩兵が激戦を続行していたが、鳥取、熊本の兵が迂回作戦をとり攻めたことにより、膠着状況を抜け出した。そのころ本郷台から佐賀藩のアーモストロング砲が山内の吉祥閣などに命中し、彰義隊の戦意をくじいた。さらに長州兵の一部が会津兵と偽装して彰義隊の背後から攻撃した。夕方の5時ごろ戦闘は終結した。新政府軍の死者は40余人、彰義隊の死者260余人。  
・この戦いの全般は大村益次郎の指揮したものであり、西郷は黒門口の攻撃に終始したわけであり、名作戦を展開したわけではない。戦いの決め手は佐賀藩のアーモストロング砲であり、長州兵の奇策であると考えられる。  
・なお激戦が展開された黒門口にあった黒門は荒川区三ノ輪の円通寺に移築されており、多くの弾痕跡がなまなましく残っている。



#### ④1877年2～9月 西南戦争

・1873年、「征韓論」で大久保らと対立した西郷は政府の官職をすべて辞し、薩摩に帰った。また新政府の要職に就いていた篠原国幹、桐野利秋ら西郷を慕う薩摩出身の若者たちもいっしょに帰国した。翌年、西郷は彼らとともに、私学校を開設した。中には銃隊学校、砲隊学校を含んでおり、新政府はこれを私兵養成機関として警戒した。また薩摩は新政府の政策を無視することも多く、独立王国の様相を呈していた。

##### 《現在の田原坂》

・西郷は若者たちの暴発を戒めていたが、77年1月、私学校の若者たちは政府の火薬庫を襲って暴徒と化した。この決起に西郷は「しまった」と絶句したという。そして2月、「もう何も言うことはなか。おはんたちがその気なら、おいの身体は差し上げもそ」という西郷の答で西南戦争が開始された。

・この戦争の挙兵の名分は、「政府に尋問の筋これあり」であり、これで全軍をまとめあげ政府に反旗を翻すには薄弱であった。

・戦略についても、《上策：全軍長崎に進んで軍艦を奪い、一軍は大阪に突入し神戸を抑えて策源地とし、他の一軍は東京に急行し横浜を抑えて策源地とし、もって天下を制する。中策：若干の監視隊で熊本城を牽制し、他は豊後方面に進出、福岡、小倉の要地をとり門司を抑えて拠点として大阪をとり、他は高知を抑えて天下を制する。下策：全軍で熊本城を囲んでこれを陥れ、もって九州を抑えて中央に突出する》が検討され、西郷小兵衛は上策、野村忍助は中策、桐野利秋が下策を主張し、結局下策をとることになった。

・兵力差は歴然としていた。最終的にこの戦いに参加した新政府軍は54000人、薩摩軍は24000人であった。兵器、艦船、食糧、軍装、軍資金など、いずれをとっても新政府軍と薩摩軍との差は圧倒的であった。

・緒戦の熊本攻城戦では、薩摩軍は13000人、新政府龍城軍は3400人であり、人数面では勝っていたが加藤清正の造った堅城に阻まれて落とすことができなかった。結局、この熊本城の攻城に時間がかかったことが致命傷になった。関ヶ原の戦いのときに徳川秀忠が上田城の攻城に時間を取られたのと同じことになったのである。

・新政府軍が小倉方面から熊本城救援のため南下してきたため、薩摩軍も熊本城の攻城をあきらめ主力が北上し新政府軍を迎え撃つことになった。高瀬方面で激戦となり、薩摩軍は援軍が加わった新政府軍の前に、田原坂方面まで撤退せざるを得なかった。

・田原坂での17昼夜にわたる激戦も、近代的兵器を擁する新政府軍の勝利で終わった。田原坂資料館には当時の両軍の兵器、軍装などが比較展示しており、薩摩軍の劣勢がよくわかる。なおこのとき兵士数では双方互角であった。

・その後、新政府軍の衝背軍が八代に上陸し熊本城に入城したため、薩摩軍はその包囲を解いた。50日余に及ぶ熊本城の攻防戦は薩摩軍の敗退で終わった。八代の上陸地には地元の人でもわからないような小さな標識がぽつんと立っている。

・薩摩軍は人吉、都城、宮崎、高鍋、延岡と敗走を重ねた。

・西郷は和田峠で薩摩軍の解散を決定し、死に場所を故郷に求め、可愛岳に上り山中を彷徨しながら薩摩を目指した。延岡市内には旭化成の工場が多く、社員のリレーションで可愛岳1日登山がよく行われたというので、私も挑戦してみたが、急坂が多くとても登りきれぬものではなかったので途中で断念した。

・城山に戻った西郷は私学校の目の前で最期を遂げた。

・この戦いは西郷にとって勝つつもりがなかった戦争であった。野村忍助らが主張した北上作戦にわずかにあったチャンスも熊本城の攻防で時間を取られ、それを逸した。この西南戦争を見ても西郷が戦さ上手であるとは言えない。



《和田峠》

#### ⑤その他の戦争

- ・北越戊辰戦争 戦闘への直接関与なし
- ・函館戦争 戦闘への直接関与なし

#### 附：5. 西郷隆盛の胆力

##### ①1864年11月 第1次長州征伐

・蛤御門の変後、天皇から幕府に長州藩追討の命が下り、総参謀を西郷隆盛とする征長軍が編成される。西郷はこの戦いを「長人をして長人を処置させる」という方針でのぞみ、そのために軍の派遣以前に長州に西郷自らが乗り込んだ。

・この工作は、長州藩3家老は責めを負って自刃、参謀4人が斬首、藩主毛利父子の謝罪状提出など、順調に進んだ。

・しかし五卿の移転問題が解決しなかった。西郷は「薩賊会奸」の首魁として憎まれている敵地：山口に乗り込み、



騎兵隊ら諸隊の長に直接会って説得し、征長軍解兵後にすみやかに五卿を福岡藩に移すことで妥協を成立させた。

・この西郷の敵地に身をさらしての交渉、そして一戦も交えずして長州藩を帰順させた胆力と手腕は、高く評価された。

②1866年1月 薩長同盟

・坂本竜馬の仲介で、大久保利通、小松帯刀同席の上、長州藩の桂小五郎との間で同盟締結。

③1867年12月 王政復古のクーデター 小御所会議

・御所の各門を西郷率いる薩摩、芸州、土佐、越前、尾張の藩兵が固め、小御所会議において岩倉具視による王政復古の大号令が宣せられた。

・しかし徳川慶喜の処遇をめぐる意見が対立し、解決の目処が立たず会議は深夜に及んだ。西郷は「短刀一本あればかたづくこと」とその覚悟と胆力を示し、岩倉具視に決断を促した。それによって会議は落ち着いた。

④1868年3月13・14日 西郷隆盛・勝海舟会談 江戸城無血開城決定

・東征軍参謀：西郷隆盛は13日高輪で、14日薩摩藩邸で勝海舟と談判を行った。

・勝海舟は無益な戦いを避けるため、江戸城の無血開城を願っていたが、徳川家の処遇などの要求が通らなかった場合は、江戸市中を焼き払い徹底抗戦を行う心底であった。その勝海舟の江戸焦土作戦は「ナポレオンのモスクワ遠征失敗」から学んだものであり、江戸市中に新政府軍を全部引き入れてから火をはなち大混乱に陥れるという作戦であった。そのために勝海舟は江戸中の火消しや魚河岸の連中、やくざ（新門辰五郎、清水の次郎長など）に手を回していた。同時に江戸湾に多くの船頭を集め、江戸市民を船で逃がし、さらに徳川慶喜をイギリスの軍艦でロンドンに亡命させることまで画策していた。

・西郷隆盛は東征軍の軍資金のことも考慮に入れ余計な戦いを避けようと考えていた。同時に勝海舟の捨て身の戦法も察知していた。その上でまだ旧幕府軍の残存兵がうようよしている江戸市中で、胆力を持ってこの交渉に臨み、江戸城の無血開城という目的を達成した。

⑤1873年 征韓論

・当時、鎖国政策をとっていた朝鮮政府は、旧幕府から新政府へと政権が変わったことを理由に国交樹立を拒否し、日本人漂流民を放置したり、釜山の外交施設を解体するなどの非礼な態度をとった。

・日本政府は、岩倉、木戸、大久保らが外遊中であったため、留守部隊の西郷隆盛、板垣退助、三条実美らが対応策を検討した。板垣退助は「居留民保護を目的に1大隊を釜山に急派すべきである。その後談判すればよい」と主張した。

西郷隆盛は「まず全権の使節を派遣して談判する。もし全権使節が殺害されるようなことがあれば、そのとき武力を行使すればよい」と話し、「その全権使節は私が引き受ける」と言い切った。三条実美は「大使は軍艦に乗り、兵を率いて赴くがよい」と言ったが、それに対しても西郷は「兵は率いずに礼冠礼衣で礼を厚くして行くべきだ」と主張した。つまり丸腰で乗り込み直談判すると主張し、その役を自分が引き受けると言い放ったのである。衆議は西郷隆盛の派遣でほぼ決定した。西郷は朝鮮を自分の死に場所と考えていたようである。もし朝鮮派遣が実施されていたら、西郷の胆力が遺憾なく発揮されていたことであろう。

・しかし欧州訪問から戻った大久保利通は朝鮮への使節派遣に反対、権謀術策を駆使して征韓論を断固阻止した。

・西南戦争後に岩倉具視は、「あのときに西郷を朝鮮へ派遣していれば」と述懐したという。

以上

\*\*\*\*\*

## 中国経済最新統計(試行版)掲載のお知らせ

上海センターは、協力会会員を始めとする読者の皆様方へのサービスを充実する一環として、激動する中国経済に関する最新の統計情報を毎週お届けすることにしました。ご参考になさってください。当ニュースレターに統計情報を掲載するのは初めての試みですが、今後必要に応じて項目や表示方法などを見直す可能性がありますので、当面、試行版として提供させていただき、引用を差し控えるようよろしくお願いいたします。また、何かお気づきの点がございましたら、ご連絡いただければ幸いです。

編集者より

### 【中国経済最新統計】(試行版)

	① 実 質 GDP	② 工 業 付 加 価 値	③ 消 費 財 小 売 総	④ 消 費 者 物 価 指	⑤ 都 市 固 定 資 産	⑥ 貿 易 収 支	⑦ 輸 出 増 加 率	⑧ 輸 入 増 加 率	⑨ 外国直 接 投 資	⑩ 外国直 接 投 資	⑪ 貨 幣 供 給 量 増	⑫ 人 民 元 貸 出 残
--	-----------------	---------------------	---------------------	---------------------	---------------------	-----------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	---------------------	---------------------



	増加率 (%)	増加率 (%)	額増加 率(%)	数上昇 率(%)	投資増 加 率 (%)	(億 <sup>円</sup> )	(%)	(%)	件数の 増加率 (%)	金額増 加率 (%)	加 率 M2(%)	高増加 率(%)
2005 年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006 年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007 年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008 年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
1 月			21.2	7.1		194	26.5	27.6	▲13.4	109.8	18.9	16.7
2 月		(15.4)	19.1	8.7	(24.3)	82	6.3	35.6	▲38.0	38.3	17.4	15.7
3 月	10.6	17.8	21.5	8.3	27.3	131	30.3	24.9	▲28.1	39.6	16.2	14.8
4 月		15.7	22.0	8.5	25.4	164	21.8	26.8	▲16.7	52.7	16.9	14.7
5 月		16.0	21.6	7.7	25.4	198	28.2	40.7	▲11.0	38.0	18.0	14.9
6 月	10.4	16.0	23.0	7.1	29.5	207	17.2	31.4	▲27.2	14.6	17.3	14.1
7 月		14.7	23.3	6.3	29.2	252	26.7	33.7	▲22.2	38.5	16.3	14.6
8 月		12.8	23.2	4.9	28.1	289	21.0	23.0	▲39.5	39.7	15.9	14.3
9 月	9.9	11.4	23.2	4.6	29.0	294	21.4	21.2	▲40.3	26.0	15.2	14.5
10 月		8.2	22.0	4.0	24.4	353	19.0	15.4	▲26.1	▲0.8	15.0	14.6
11 月		5.4	20.8	2.4	23.8	402	▲2.2	▲18.0	▲38.3	▲36.5	14.7	13.2
12 月	9.0	5.7	19.0	1.2	22.3	390	▲2.8	▲21.3	▲25.8	▲5.7	17.8	15.9
2009 年												
1 月				1.0		391	▲17.5	▲43.1	▲48.7	▲32.7	18.7	18.6
2 月		(3.8)	(15.2)	-1.6	(26.5)	48	▲25.7	▲24.1	▲13.0	▲15.8	20.5	24.2
3 月												

注：1.①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。  
2.中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1 月と 2 月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、( )内の数字は 1 月と 2 月を合計した増加率を示している。  
3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の 86%（2007 年）を占めるている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。  
出所：①—⑤は国家統計局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。